

早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)

第1回ふくしま学(楽)会

ふくしまから伝えたいこと
知らなければならないこと

報告書



日時: 2018年1月28日(日)13:00~17:15

会場: 福島県広野町二つ沼公園内パークギャラリー

主催: 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター、ふくしま学(楽)会実行委員会、
早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)

共催: 福島県広野町

【開会挨拶】

松岡俊二(早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長)

今日は、地元の方々だけではなく、県・国からも参加をしてもらっています。また、遠方の京都からも来て頂いております。大震災・原発事故から7年が経過しようとしている中で、今回のふくしま学（楽）会において福島県浜通り地域の未来を切り拓くための活発な議論がなされることを期待しています。

遠藤 智(広野町長)

昨年、早稲田大学リサーチセンターを設置して頂き、そして今回、第1回ふくしま学（楽）会を開催して頂き、先生方には感謝申し上げます。この7年、被災地では様々なことがありました。特にこの間、特措法の改正がおこなわれる等の大きな転換点を迎えています。今後、大震災の経験を未来の子供たちにどう伝えていくのか。この学会において本音で語り、皆様の思いを伝えてほしい。そして、その思いとともに前に進んでいきたい。今回のふくしま学（楽）会がそのような場になることを願っております。

柳沼英樹(福島県教育委員会県立高校改革室・室長)

今回の学会に参加できたことをうれしく思います。県教育委員会では、頑張る学校応援プランを昨年から実施しています。その取り組みによって子供たちの体力向上などがみられました。関係の皆様には感謝申し上げます。未来学園高等学校はこの3月にはじめての卒業生が誕生します。未来学園高校では、未来創造探求という活動をおこなっています。スーパーグローバルハイスクールの報告会において、未来学園の活動報告がなされましたが、県教育委員会としても引き続きサポートをしていきたいと考えています。本日の学会の内容を楽しみにしています。

勝野真輝(経済産業省福島新産業・雇用創出推進室・係長)

ここ広野町では、生活環境の整備が進み、居住率も80%を超え、復興に向けて着実に進展しているものと認識しています。今回の会議で、福島の実状を正しく理解するとともに、地域住民や地域団体、大学、行政が一致団結して復興の取組が加速されるものと思います。昨年末、ふたば未来学園高校の生徒の皆様が探求テーマの報告を聞き、主体性を持って取り組んでいることに大変感銘を受けました。今日のふくしま学（楽）会が、成功することを祈っております。

【基調報告 13:15－13:30】

研究代表者 松岡 俊二(早稲田大学・教授)

「東日本大震災・福島原発事故から7年:「フクシマの教訓」と今後の福島復興のあり方を考える」

・今日の報告は全体の方向性を示すものであり、これまでの取り組み、現状把握、復興とSDGs（国際社会）の関係について議論したい。

・「フクシマ」の表記について

私自身、大震災があつて初めて東北を訪れた。私が、「フシシマ」の表記にこだわるのは、前任校が広島大学であったことにも由来する。広島では8月6日を意識するときには、「ヒロシマ」と表記がなされている。フクシマという表現は、ヒロシマの発想と同じである。詳しくは、私が所長を務める早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI) HP上に、その理由を載せてあるので参考にしてほしい。福島の方々には、

フクシマという表記に疑問のある方がいることも承知をしている。

・大震災当日とその後

「3・11」のその日、私は JICA の廃棄物問題の調査研究で埼玉大学の先生方とスリランカにいた。ちょうどスリランカで一番古いペラデニア大学で打合せ会議をしていた時であった。スマトラ沖の大地震で大きな津波被害を受けたスリランカの人々は、地震や津波の情報にとっても敏感で、大学の事務の人から「日本で大きな地震があったとニュースで報じられている」と告げられた。「日本では地震はよくありますからね」と答えていたのだが、お昼休みの後に調査で訪問したガンボラ町役場のテレビで、BBC 国際放送の仙台平野の大津波の映像をみた。あまりにも非日常的で SF 的な映像であったが、瞬間的に日本の大地震による大津波の映像だと分かった。BBC は当日の 3/11 はこうした地震と津波のニュースが中心であったが、翌日 (3/12) の福島第 1 原発の一号機の建屋爆発の映像が流れて以降は、BBC 国際放送は福島原発事故が中心となった。祖国から遠く離れた地で、大災害の中にある祖国を思うと言い知れぬ焦燥感を覚えた。私にとって、特に福島原発事故は衝撃的であった。大学の講義で、それまでは温暖化対策のために原発を安全に使っていくことの必要性を話していたが、いいかげんな事を学生に教えてしまっていたとの思いに駆られた。その後は、共同研究を組織し、書籍出版やリサーチセンターの設置などをおこなってきた。

・「フクシマの教訓」とは何か

1979 年のスリーマイルアイランド原発 (TMI) 事故の教訓として、世界は実際に原発の過酷事故が起きた時の深層防御の具体化に取り組んだ。1986 年のチェルノブイリ原発事故の教訓から、原子力事業者や社会における安全文化の重要性や原発事故は地球環境問題であるとの認識が世界に共有された。福島原発事故のレッスンをしっかり考えなければならない。レベル 7 の過酷事故が起きた時の Post Accident Management の方法も考える必要がある。福島県がアーカイブ拠点を設置するのも重要な活動である。



・福島現状

三菱総研の東京都民に対する福島についてのアンケート調査によると、福島の農産物に対しては、自分は気にならないが、家族や友人に勧めるのは躊躇するとの意見が多く、依然として「風評被害」が根強い。国や福島県の復興政策としては、早期帰還支援と避難指示の解除が大きな方向となっている。福島県は 2020 年の避難者 0 を目指している。昨年末の復興庁の調査では、震災当初よりも避難者数は大きく減少しているが、まだ約 5 万人の避難者が存在し、特に県外避難者の多さが福島災害の特殊性を示している。国や県の進めるイノベーションコースト構想により、福島県浜通り地域に廃炉産業のクラスターが形成されると、外部から多くの研究者や作業員が転入し、元々住んでいた地域住民が県外・県内避難を続ける極めてパラドキシカルな近未来が、この地域に出現することが危惧される。

・提言として

日本の総人口は 2053 年には 1 億人を切ると予想されている。増田元総務大臣が地方都市消滅や消滅自治体について論じたが、日本の多くの地域社会は深刻な衰退現象に直面しつつある。こうした日本の地域社会の状況を踏まえて、福島の再生をどのようにするのかを考える必要がある。人口減少や高齢化は

日本だけの特異な現象ではない。フランスなどは上手に対応してきた。地方創生という国のやり方（政府による解決）だけでなく、市場的解決やコミュニティによる解決をうまく組み合わせたことがフランスでは成功要因となった。最も困難な地域である福島だからこそ、日本や世界の地域再生のモデルとなる福島再生を創り出すことが必要だし、可能ではないかと思う。今日は、こうした点も会場にいる多くの多世代の皆さんと議論したい。

【テーマ1 13:30-14:40】

今、福島から世界へ伝えたいこと（ひと、もの、ことの交流）

司会：永井祐二（早稲田大学環境総合研究センター・主任研究員）

提案1（高校生から）

ふたば未来学園高校・三橋グループ

「高校生が同世代に伝えたいこと、高校生が案内する視察ツアーの提案」

- ・高校の授業で問われた質問と修学旅行での語り部さんからの話を聞いて

修学旅行前の地理の授業で、「戦争を有効に伝える手段が減ってきているのはなぜか」と先生から問いかけられた。今、第二次世界大戦を伝える人が、時が経過するとともに少なくなるように、「3・11」もそうなると思う。だからこそ、自分自身が「3・11」の語り部としてやっていきたいと思っている。



- ・グループとしての提案

原子力防災班でコミュニティ、特に地域の人々との関係に着目している。私は、風評被害に着目している。他のメンバーは人口減少をテーマに扱っている。現在、町役場にツアーの提案をすることや福島の食への安全性をどのように伝えていくのかを考えている。「3・11」を忘れないように、体験していない人々に伝える必要がある。100年後にも伝えるコアなメッセージが必要だと感じている。福島では「3・11」以降、福島県の人々は「我々は変化していないが、県外の人々が変わってしまった」と言う。福島県外の人の中には、「福島の食は厳しい基準があるから安全だし、『3・11前』、福島のことは何も知らなかったが、今は多くのことを知っている」と言う人もいる。

- ・世界に伝えたいこととは何か

私は、福島の安全を伝えていく必要があると感じている。福島の農家が一番被害を受けた。自分達だけでは限界がある。社会システムの変革が必要である。語り部さんから話を聞くなどして、興味を喚起させることができる。アーカイブ拠点ができる話が自分の知らないところで作られている。それでは、本当の福島は伝わらない。なぜならば、「3・11」の体験は一人ひとり異なるからである。同じ経験をしている人を探すのは難しい。一人一人の体験をパンフレット化するのも有効である。私たちが生きた教科書として活動するのが重要である。

提案 2(地域団体から)

根本賢仁(広野わいわい PJ・理事長)

「地域でのイベントを通じた賑わい・生業づくりの取り組み」

・活動紹介

今まで、広野わいわい PJ では、コットン作りや防災緑地の造成、広野町の賑わいづくりや除染作業員との共存、女性の手仕事、手仕事で出来た商品販売を中心に活動をおこなってきた。地域のコミュニティが壊れたが、活動を通じて再生する。地域で生産された農作物を販売する。それも地域再生の一環である。

・今後の課題

交流促進についても課題がある。広野町にリピーターとしてくる人達が増えている。復興の現状を伝える、ツアーが中心になっていますが。そこでネットワークを構築していくことが、重要であると考えます。女性の手仕事に関して、商品開発、テスト販売を行ってきました。これからも、賑わい・生業が出来ることや、崩壊した地域のコミュニティの再生のために、農産物を生産する生き甲斐を一つの手段として地域再生を進めたい。



島村守彦(いわきおてんと SUN 企業組合・事務局長)

「現地視察ツアーや地域参加イベントの取り組み」

・これまでの実績

福島県の再生可能エネルギー普及事業として移動 SVO 発電車を使い、福島県内各地で自然エネルギー講習会を実施しており、その回数は年間 50 回程度にまで及ぶ。

・海外活動成果

我々の活動は、福島県内だけではなく、ミクロネシア、フィリピンの未電化地域での活動の他、ネパール地震からの復興支援にも取り組んでいる。



・今後に向けて

福島へ世界各国から支援を頂いた。そのことを決して忘れてはいけない。福島県浜通り地域での活動は課題を抱える途上国や、世界各地で発生している自然災害困地域でその経験が生じ、福島からの恩返しをして行きたく考えます。

提案 3(行政・大学から)

大手信人(京都大学・教授)

「市民参加型の森林手入れの可能性」

・これまでの地域住民と森との関係について

私は、これまで伊達市の森林内での放射性物質の動きに関して調査研究をおこなってきた。その中で気がついたことであるが、福島の方々は森の恵みと共生しながら暮らしてきたという点である。森林のことを調べていくうちに農業や林業にもつながっていることを感じていた。

・震災に関するコミュニケーションについて

私事で恐縮であるが、我が家では、福島の話に関して、コミュニケーションの問題に引っかかりを覚えていた。私は研究上、現地に入って調査をすることが多いが、我が家の他の家族はそうではない。一例ではあるが、福島の農産物は安心だと現地に行き行って感じたとしても、そうなのかなといった反応が返ってきてしまう。この例からも分かるように、福島に関するコミュニケーションは難しい。



・森林体験の重要性について

私は福島に関する研究を通じて様々な気づきを得ている。少々時間はかかったが、5年ほど経過してから、地元の人々が調べて欲しいことが分かってきた。その中で、森林体験が世代を問わず減っており、若いうちから体験することが望ましいと感じている。今日は若い世代の方も参加されているので、ぜひ伝えたいのは、若い人は考えなければならないことから逃げないで欲しいという事である。私がこの点を強調するのは社会システムの変革には考えることが必要だからである。

石田弘枝(福島県企画調整部文化スポーツ局生涯学習課・主幹兼副課長)

「アーカイブ施設構想および地域参加の可能性」

・アーカイブ拠点整備の事業方針

本アーカイブ拠点の基本構想は、未来への継承・世界との共有、防災・減災、復興の加速化への寄与である。事業活動方針は、4視点で構成される。「収集保存」では、記録の蓄積と後世への保存が目的となる。「調査研究」では、経験と教訓を生かす人材育成とネットワーク化をテーマとしている。「展示・プレゼンテーション」では、リアルな展示や体験、プレゼンテーションを通じて、福島にしかないプログラムを提供する。「研修」では、原子力災害の教訓の伝承並びに未来への安全につなげることを意図している。



・資料の収集状況と今後について

展示に活用する資料は現在収集中であるが、現在、約5万点の資料の収集が完了した。アーカイブ拠点

で収集する資料は、紙や写真といった一次資料だけではなく、災害体験手記やその当時の報道資料、視聴覚資料といった二次資料も収集の対象としている。このアーカイブ拠点は人が行き来する施設にしたいと考えている。

【テーマ2 14:50－15:50】

今、福島について知りたいこと(原子力災害への対応など)

司会:磯辺吉彦(広野わいわいPJ・事務局長)

提案1(高校生から)

ふたば未来学園高校・遠藤グループ

「原子力災害への対応などを調査した中で、知らなければならぬと感じたこと」

・高校で行っている活動

ふたば未来学園高校での課外活動では、ふるさと創造学を実施している。私は、原子力防災班の一員として活動している。課外活動を通じて、原子力に関して功罪を調べることにした。調査を進めていくうちに物事の二面性を学んだ。我々の活動に関して、JSTが主宰をするサイエンスアゴラに参加し、報告をおこなった。

・村上陽一郎『人間にとって科学とは何か』から現状を考える

この本を通じて、科学とは何かを考えさせられた。現状とリンクさせると、様々な論点が浮かび上がってくる。まず、身近な大人が放射線に関連することを知らない。放射線に関する情報を正しく理解できない。

「生活者がもつべきリテラシーとは何か」との問いも浮かぶ。科学的リテラシーがなければ、情報を鵜呑みにしてしまう可能性もある。科学技術に関して人々が関心やリテラシーを持つことが大切である。さらに、そのリテラシーを育むためには、学生の時からリテラシーを学ぶ必要がある。1点疑問があるのは、リテラシーとは何か、それが不明である。



・汚染水の海洋投棄に関して

トリチウム水の海洋投棄に関してこの場で議論したいと考えている。漁業組合の方々は、既知のことであると思うが、それ以外の方々にとっては、あまり問題を認識していないのではと感じている。高校でトリチウム水の話をしていても誰も認識していなかった。この問題は社会的合意が重要であると思う。

提案2(地域団体から)

菅波香織(未来会議・事務局長)

「今後の廃炉に向けて、市民が知っておかなければいけない問題について」

・廃炉・最終処分に関して

私はいわき市で弁護士をやっている。その立場から話をしたい。廃炉・最終処分に関して、思うように進んでいない現状もある。高レベル放射性廃棄物の最終処分場建設を例にあげると、最終処分場が決定

していない。中間貯蔵施設についても場所が確定していない。これらの施設建設には、建設予定地の住民の合意が欠かせないが、合意が容易に得られるとは考えにくい。

- ・合意の意味に関して

合意に関して、「合意が大切だ」と思っている人は多い。例えば、漁業者さんと合意をしなければいけない事案の場合、漁業者さんの合意が大事である。先ほどの最終処分場建設でいえば、周辺住民との合意が重要であると一般の人は思ってしまうがちである。しかし、合意が形成されたからといって、人々が満足するとは限らない。同意（合意）をしたことで後に責めを受ける懸念もある。今回の原発事故でいえば、プロ意識をもつ官庁には、自分たちに任せろという意識があるにもかかわらず事故が起きた。誰が意思決定するのか、それが今後の課題であると感じている。



福島裕（農業）

「風評被害について」

- ・自分が住む地域に関して

今日は、一農家としてこの場に参加している。私の農園は常磐道四ツ倉インターの近くにある。もともと、農家出身ではない。妻の実家が農家であったため、定年退職後、農家を始めた。農家を始めて3年後、「3・11」が発生した。私が今暮らしている場所は、限界集落で、メンバーが21人、13人が高齢者である。周囲に後継者がいないため、農地が休耕地・耕作放棄地になっている現実があるので、その状態を解消し、次の世代に受け継がせたいと感じている。



- ・原発事故で感じたこと

「3・11」の際、中山間地にいたため津波の影響はなかったが、放射能の心配が強かった。生活をしながらはならないため、県の農林水産課に相談をして、道の駅に安全とお墨付きのでたものを販売するに至った。健康に対しての不安を解消することが欠かせないと感じるようになった。私は、きれいな環境で、（すなわち、農薬を使わないなど）、農業活動をし、その土地を後世にゆずりたい、今、The Peopleの吉田さんの力添えで、コットン栽培をしている。

- ・風評被害の払しょくに関して取り組んでいること

農業を営みながら感じるのは、コットン経験をツアーでしてもらおうと、「また来たい」、「体験がしたい」との声を県外・県内を問わず、多く聞かれるようになったことである。また、放射能検査の結果をみせることで風評被害を低減することができる。今日伝えたいのは、自分が旗振り役になったのではなく、来られた方が自主的に動くことの重要性である。

提案 3(行政・大学から)

森口祐一(東京大学・教授)

「今後の対応において予想されるリスクや国際社会の対応など」

- ・現在の研究テーマに関して

3・11の際に、国立環境研に在籍していた。今でも放射能のこともやっているが、現在は、初期被曝に焦点を当てて研究をしている。アーカイブ拠点に関連して、先行した展示施設には批判的な意見もあり、原爆資料館のようにすべきとの声も聞かれる。今後の課題である。

- ・5W1Hの重要性に関して

今、Yes、No でこたえられる疑問はなく、5W1H で知りたいこと、伝えていたいことを考える必要がある。誰に伝えるのかも重要である。理系の人々は、量で考えがちである、そうではなく、5W1H で考えるべきである。たとえば、Where に関して、サイト内なのか、サイト外なのか、県内なのか、県外なのか、国内なのか、国外なのか、様々な論点がある。

- ・今後の課題について

何十年後に放射性物質を含むタンクが残っていたら、その時代の人々は当時の人々(我々)に対して、「なぜ処理してくれなかったのか」との気分になるかもしれない。フューチャーデザインが大事である。トリチウムも、海に流す、地層注入する、水蒸気として大気に流すなど、様々な選択肢が存在し、コストの観点から決められていく可能性も高い。誰がどうやって決めていくのか、プロセスを地元の方々が関わっていかなければならない。その点が課題として残っていると感じている。どの問題に焦点を当てていくかが重要である。今日の高校生の報告を聞いて、大変感銘を受けた。将来世代は希望が持てると感じた。



中津弘文(広野町復興企画課・課長)

「広野町における諸問題をふまえた新しいまちづくりについて」

- ・広野町の復興の状況に関して

現在、広野町の帰還率は60%を超えてきた。初期段階では、汚染された環境を改善することを優先課題としたが、現在では、町づくり、それも将来を見据えた町づくりを目指している。震災直後の1年間は避難をした。未来学園ができたことで、広野町が生き残れると感じた。町づくりを進めるにあたって、様々な政策が国や県などであるが、どのような政策かが住民に伝わっていないと感じている。



・廃炉関連に関して

廃炉に関して、科学的不確実性の観点から 30－40 年となっているが、この期間がさらに延びるかもしれない。それはやってみないと分からないと廃炉サミットでお話しされた方がいた。環境的には、事故当初に比べ元に戻っていることを肌で感じている住民も多いのではないかな。

・行政マンとして思うこと

国や県に依存的になっている気がし、住民と自治体の関係も上手くいっているのかという疑問を感じている。今後、地方自治体と国・県との関係、地方自治体と住民との関係をより良いものにすることが課題である。

【パネルディスカッション 15:55-17:00】



南郷：高校生兩名が大変良いプレゼンをした。100 年後、200 年後に何を伝えるのか、とても大事なテーマである。私たちは何を伝えるべきなのか。2 つのテーマが思わぬ形でつながった。

発言 1：私は檜葉町の出身であるが東京に住んでいる。復興計画のビジョンとして協働という言葉がある。この言葉は、役所も上手く説明できていないと感じる。今日のイベントに参加して、高校生の報告は、広く深く復興に関わっていると感じた。専門家の方は昔と変わっていないという印象を受けてしまった。合意形成が復興のキーワードである。

発言 2（大和田）：東京新聞で連載を書いている。ぜひ現地の方々の意見を聞きたい。

発言 3（吉田恵美子）：オーガニックコットンプロジェクトを通じて多くの方々に来ていただいている。参加される方々は、最初は「かわいそう」だと思って参加していたが、プロジェクトを通じて、意識が変

化する。「3・11」を忘れようとしている人々の意識をどう変えるのか、そこが課題である。専門家の方々の知恵を頂きたい。

発言 4: 高齢者の家庭訪問を広野町でおこなっている。そこで会う人々は、大変たくましいと感じている。「3・11」の時、放射線量の基準が度々変わることによって不安を覚えていた。国は住民を守る気がないのかと思ってしまう。

松岡: 専門家・学者の役割に関して、さらに双葉郡 8 町村の今後の協力のあり方についても議論したい。

大手: 専門家が口を出しても、どうしても政治的判断が入ってしまう。無関心な市民に対して専門家がどのようにアプローチするのか。科学リテラシーの問題かもしれない。先入観を排除するのは難しい。学者が社会リテラシーを持って、それをどう一般市民に落とし込むのか。

森口: 学者の問題点を具体的に指摘して欲しい。「3・11」当時、オープンにならなかったデータが存在した。それを論文にしたら、「今頃何か」、「遅い」との反応が出る。だが、時間をかけ公表できないデータもある。7 年経過して、発言しにくい環境が出来ている。伝えていかなきゃいけない責任と将来につながるようにそれを生かすことが必要である。専門家が総括できていないのではないのか。

松岡: 放射線のリスクガバナンスに関して言うと、専門家だけでリスク基準を決めてはいけない、これが国際的認識である。しかし、緊急時の場合にどこまで住民とどのように議論すべきなのか。また、福島復興においては、住民参加の視点が明らかに欠けていることも問題だと感じている。

中津: 行政決定プロセスが分かりづらいとの声がある。この問題は最終的に国レベルの話にまでなってしまう。行政に対してスピードを求めるが、住民対話をするのが時間がかかるのは当然である。

松岡: 全て住民参加でというわけではないが、福島復興は明らかに住民参加が少ない。

中津: 住民を巻き込むのは難しい。

松岡: 現在では常識として、住民が自分自身で決定することが重要である。

菅波: 議会と行政との関係に住民が参加しにくい。納得できるプロセスがあるのならば、満足する。それがないから満足しない。

三橋: 共同体的感覚という言葉を知った。友達は、共に体験するという意味だといっていた。批判を恐れすぎていると言う話だが、高校の中でも 1 人はいる。若い世代でも興味を持ってもらうのは難しいと感じている。

発言 5: 今日の講演タイトル、「誰に伝えたいのか」、「誰が知らなければならないのか」、そこが重要である。教訓は考え続けることを止めなければ出てくるものである。決定プロセスであるが、速さを重視することで住民無視を感じることは考えられる。住民に納得してもらえるか、突き詰めていく必要がある。だが、上手くいかないと感じることもある。一人ひとりが足で稼いでいく必要性がある。

松岡: 教訓を具体化するには、暗黙知の共有が重要である。

石田：何を伝えるのかに関して、有識者曰く、上から伝えるのではなく、事実を淡々と伝えることが重要だと言われた。5W1Hに加えて、**Whom**がある。アーカイブを通じて、見学者が自分のこととして感じて欲しいとの思いがあるのでその方向性で尽力している。

南郷：未来学園には来訪者が多くある。事実を淡々と伝えている。アメリカの「9・11」メモリアルを見た時、何を伝えたいのか良く分からなかった。「3・11」のアーカイブ拠点はそうなって欲しくない。原発と再生可能エネルギーのどちらがよいかといった議論も高校では出来ていない。一歩踏み出していないといけない気がしている。

森口：将来デザインに関して、同じところに興味を持っているから出会いがある。潜在的には興味を持っている専門家が多いのではないのか。将来デザインは住民レベルからデザインしていくことが重要である。

松岡：可逆性はフランスの最終処分に出てきた議論である。どこかで元の状態に戻って議論する必要性がある。福島へのアプローチは、挑戦していく、チャレンジしていくことで、新しいモデルを作る形となるのであろう。それが世界のモデルにつながる。

永井：この地域で立場を超えた議論は、従来は消化不良感があり、ひざを詰めて話してみたかった。1回目は想定どおりにはいかなかったが、2回目はより上手くやりたいと感じている。

以上

【当日の会場写真】



